

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第113集

東 端 城 跡
御 船 城 跡
矢並下本城跡

2002

財團法人愛知県教育サービスセンター

愛知県埋蔵文化財センター

御船城跡



御船城址石碑前にて

竹内 隆・鈴木 裕・成瀬友弘・武部真木
安達亜紀子・阿部治己・石川恵子・尾崎 操・甲斐茂夫・岸田鶴子・岩月好典
近藤 誠・澤田節子・篠田 忍・鈴木智恵・鈴木幸範・須藤光子・只野国雄
中島明美・仲野和毅・中山行天・野場義和・深津祐一・福島和人・村松賢子
村瀬 燕・山北圭子・渡辺周子・深谷 勝

例　言

1. 本書は愛知県豊田市御船町字島田に所在する御船城跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は東海環状自動車道建設に伴う事前調査として国土交通省名四国道工事事務所より愛知県教育委員会を通して委託を受けた(財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は平成14年4月~8月である。調査面積は3,570 m²である。
4. 発掘調査は竹内 瞳(主査)、鈴木 裕(調査研究員)、現碧南市立西端小学校教諭)、成瀬友弘(調査研究員)、武部真木(同)が担当した。
5. 調査にあたっては、豊田市教育委員会、愛知県教育委員会の各関係諸機関、および御船自治区長澤田正義氏、副区長白山正氏の協力を得た。
6. 調査記録および遺物整理等の作業には、山口典子(研究補助員)、中村たかみ、山田有美子、齊藤佳美、後藤恵里、木下ひろみ、三浦里美、伊藤ますみ(整理補助員)の協力を得た。
7. 出土遺物の写真撮影には名古屋市美術館 福岡栄氏に依頼した。
8. 「御船城跡」の執筆は、第1章^aを鬼頭剛が、その他の執筆と編集を武部真木が行った。
9. 本書をまとめるにあたり、次の諸氏に御指導、御助言をいただいた。記して感謝したい。藤澤良祐、金子健一、齊藤基生、山下峰司(敬称略)
10. 今回の調査に使用した方位・座標は国土交通省の定めた平面直角座標第VII系に基づくものであり、海拔座標はT.P.(東京湾平均海面高度)による。ただし、表記は旧測地系(日本測地系)とした。
11. 本書に関する出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターが、調査記録等は(財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが管理・保管している。

本書で使用した遺構略記号

SD…溝 SK…土坑 ST…耕作地 SX…不明遺構 SE…井戸 P…柱穴

遺物図版陶磁器類 凡例

古瀬戸…後期III段階→「後III」

大窯…大窯I段階→「大I」

連房式登窯…連房式登窯第1小期→「1小期」

鉄軸→「鉄」／灰軸→「灰」／鍛軸→「鍛」／志野軸→「志」

*1 藤澤良祐1996「中世瀬戸窯の動態」「古瀬戸をめぐる中世陶器の世界」(財)瀬戸市埋蔵文化財センター設立5周年記念シンポジウム

*2 藤澤良祐2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要10

*3 1998『瀬戸市史』陶磁史篇六

目 次

第1章 調査の概要……………1

- 1 調査の経緯と経過
- 2 遺跡周辺の環境
 - a. 御船城跡周辺の地形・地質
 - b. 周辺の遺跡分布
 - c. 御船城跡の沿革

第2章 遺構 ………………8

- 1 基本層序
- 2 A・B区
- 3 C区

第3章 遺物 ………………16

- 1 土器・陶磁器類
- 2 石製品・その他

第4章 まとめ ………………26

・写真図版および図版（PL.1～7）

・一覧表類（遺構および掲載遺物）は付属CD-ROMに収録

図版目次

- PL.1 調査区全景（空撮写真合成）
- PL.2 遺構写真（1）
- PL.3 遺構写真（2）
- PL.4 遺構写真（3）／出土遺物写真（石器・銭）
- PL.5 出土遺物写真（陶磁器類1）
- PL.6 出土遺物写真（陶磁器類2）
- PL.7 調査区全体図（S=1/600）

挿図目次

- 第1図 調査区位置図（S=1/2,500）
- 第2図 遺跡周辺の地質
- 第3図 豊田市北部地域の遺跡分布（S=1/50,000）
- 第4図 01A区 SK166 平面・断面図（1/40）
- 第5図 01B,C区 土層断面図（縦 S=1/50、横 S=1/300）
- 第6図 01C区 SD04 土層セクション（1/40）
- 第7図 01C区 SD04 出土遺物の分布（遺構図 S=1/200）
- 第8図 基本平面図1（S=1/250）
- 第9図 基本平面図2（S=1/250）
- 第10図 基本平面図3（S=1/250）
- 第11図 基本平面図4（S=1/250）
- 第12図 01C区 SD04 出土遺物（1）
- 第13図 01C区 SD04 出土遺物（2）
- 第14図 01C区 SD04 出土遺物（3）
- 第15図 01C区 SD04 出土遺物（4）
- 第16図 01C区 包含層出土遺物（1）
- 第17図 01C区 包含層出土遺物（2）
- 第18図 01C区 SD05,06／01A・B区出土遺物
- 第19図 石製品・その他
- 第20図 主要街道模式図
- 第21図 周辺地図（S=1/3,000）

第1章 調査の概要

1 調査の経緯と経過

御船城跡は愛知県豊田市御船町字島田に所在する中世城館を含む遺跡である。豊田市北部に位置し、猿投グリーンロード枝下インターから、県道明智・豊田線を豊田市方面へ南下すると矢作川水系の支流、御船川が流れる標高約70m前後の平坦地が広がる。遺跡はこの御船川右岸に立地している。

東海環状自動車道建設に際し、計画範囲内の御船城跡の発掘調査及び記録保存の必要性が認められた。そのため国土交通省名四国道工事事務所より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、(財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが平成13年4月～8月にかけて発掘調査を実施した。範囲は城館跡推定地の南西側に隣接する地点であり、A・B・Cの3調査区に分割して計3,570 m²（試掘面積を除く）の調査を行った。

調査開始前の現況は、水田耕作地帯であった。調査区の北側にあたる城館跡推定地には石碑と豊田市教育委員会によって設置された遺跡の解説を記す看板があるのみで、往時の面影はない。旧聞では昭和50年代の圃場整備が開始される以前には、ここに土塁等の痕跡が残存していたという。

調査開始 4月24日フェンス設置

B区 4月24日表土剥ぎ開始、6月5日空測

A区 5月半ば表土剥ぎ先行、6月11日作業開始、7月31日空測

C区 6月28日表土剥ぎ開始、7月9日作業開始、7月31日空測

調査完了 8月20日埋戻し完了



第1図 調査区位置図 (S=1/2,500)

2 遺跡周辺の環境

a. 御船城跡周辺の地形・地質

御船城跡は愛知県の中央部、西尾市・豊田市および周辺地域に拡がる矢作川沖積低地の上流部に位置する。矢作川沖積低地は北西・西側を猿投・知多上昇帯にあたる猿投山・知多半島の丘陵地帯に、東・南東側を領家帯の構成岩類からなる三河高原にはさまれた沖積低地である。矢作川によって運ばれた碎屑物が形成した平坦な台地・沖積低地が拡がる。矢作川沖積低地は豊田市水源町付近の長さ約4kmにわたる峡谷（豊田峡谷）によって、上流側の豊田盆地と下流側の低地部とに分けられる。御船城跡は矢作川が知多湾にそぞぐ河口から約20km北方で、豊田峡谷の上流約12kmの豊田盆地にあたる豊田市御船町に立地する（第3図）。調査地の地表面標高は約75mである。調査地の東側約200mには御船川が北西から南東方向に流下し、調査地点から約1.5km南東で矢作川に合流する。調査地の西側と北側は標高約100mの台地によって囲まれる。台地は矢作川の北西側で広く、いくつかの段丘をきざみながら南から東へ向かって低くなる。

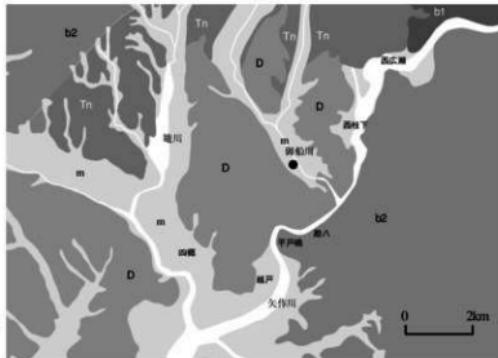
矢作川流域の自然地理学的研究には、井関・貝塚（1953）の碧海面の微地形形成に関する研究を先駆として、町田ほか（1962）、森山（1994）、森山ほか（1997）の地形発達に関する総括的な研究がある。町田ほか（1962）は矢作川流域に発達する段丘面を高位から三好・拳母・碧海・越戸面の4段に区分し、これらの北方にあたる中新統～鮮新統の瀬戸層群がつくる丘陵面を藤岡面と呼んだ。地質学的研究には糸魚川・中山（1968）、森（1984）、桑原ほか（1986）、松島（1990）の主に貝化石や微化石分析に関する研究がある。矢作川沿いには新第三系と第四系が分布し、下位より新第三系中新～鮮新統の瀬戸層群、中部更新統の三好層、中部更新統の拳母層、上部更新統の碧海層、最上部更新統の越戸層・第一疊層、完新統に分けられる（町田ほか、1962；牧野内・小井土、1988）。これらのうち、調査地点の北方では瀬戸層群が分布し、調査地点を囲む台地は中部更新統拳母層からなる。発掘調査地周辺では厚い完新統の堆積はみられない。更新統について町田ほか（1962）、牧野内・小井土（1988）をもとに概説する。

中部更新統下部の三好層は標高35～110mの三好面構成層である。町田ほか（1962）により命名された。層厚6～20mで、西加茂郡三好町筋生から豊田市小黒実付近を通り西加茂郡三好町明知付近まで分布する。主にチャートの中～大疊からなり、中位層準では砂層をはさむ。疊径は一般に南部ほど細粒化する。中新統～鮮新統の瀬戸層群を不整合に覆う。発掘調査地点付近での分布はなく、主に約6km西方に北東・南西方向に細長く分布する。

拳母層は標高20～130mの高位段丘である拳母面をつくり、矢作川東岸地域では標高30～50mの拳母面相当面をつくる地層は細川層・仁木層・見合層と呼ばれる。拳母層は町田（1962）により命名され、豊田市西枝下周辺を模式地とし豊田市地域を中心に分布する。層厚は6～12mであり、下位の三好層を不整合に覆う。模式地である豊田市西枝下や御船城跡の立地する豊田市御船付近（第2図）では礫層、発掘調査地点の西側約2.8kmの篠川から南では砂層からなる。拳母層は疊径20～30cmの円～亜円疊からなり、疊径は南に向かうにしたがって細粒化する。疊種は主に花崗岩・濃飛流紋岩・チャートからなり、篠川よりも南に分布する砂層は細疊混じりの粗粒砂からなる。疊層は全体に風化して茶～赤褐色になり、チャート以外の疊はいわゆるくさり疊になる。御船城跡の調査地点では拳母層を覆つて褐色～赤褐色を呈する完新統が層厚約1mと、ごく薄く堆積する。

凡例
 m:上部更新統最上部～完新統
 D:拳母層および相当層
 Tn:東海層群(瀬戸内層群)
 b2:先新第三系(花崗閃綠岩)
 b1:先新第三系(粗粒黑雲母花崗岩)

経済企画庁(1972)を基に一部改変
 ●は遺跡の位置



第2図 遺跡周辺の地質

碧海層は中位段丘構成層である。豊田峡谷よりも南半部を占める標高5～80mに分布する。町田はか(1962)により命名され、模式地の指定はない。中～大礫からなり、南部ほど細粒になる。南部では細礫を含む砂層となり、粘土の薄層もはさむ。発掘調査地点の約2km南方にわずかながら分布が見られるが、豊田峡谷よりも南側では豊田市南部から知立市、安城市、碧南市、西尾市までの広大な分布を示す。南端の西尾市一色町では中位層準に海成泥層がはさまれるとの報告がある(桑原, 1982; 桑原ほか, 1986)。北部の矢作川に沿う地域では先新第三系の花崗岩類や瀬戸層群を、南部の碧海台地では拳母層などを不整合に覆う。

最上部更新統である越戸層は低位段丘構成層である。矢作川流域に断片的にみられ、標高35～55mの越戸面をつくる。町田はか(1962)により命名され、層厚は数mである。模式地は発掘調査地の南方約5km、名古屋鉄道三河線の越戸駅北方の豊田市越戸町である。発掘調査地での分布はみられない。主に花崗岩の亜円の大礫からなる層で、チャートなどの細礫も含まれる。下位の段丘構成層と比べると礫は新鮮である。

(鬼頭 剛)

参考文献

- 井関弘太郎・貝塚爽平, 1953, 西三河の風土-台地と周辺低地-, 明治用水誌編纂委員会:「明治用水」, 明治用水史誌編纂委員会, 7-26.
- 糸魚川淳二・中山 清, 1968, 愛知県高浜町碧海層群第四紀貝化石群, *Venus*, 27, 62-75.
- 桑原 勲, 1982, 西三河地区(矢作古川流域)の地下地質と地盤沈下, 愛知県地盤沈下研究会報告書, 愛知県, 8, 95-136.
- 桑原 勲・吉野道彦・森 忍, 1986, 西三河地区(碧海盆地)の地下水盆構成について-一色・碧海銀測井コアの微化石分析結果による検討-, 愛知県地盤沈下研究会報告書, 愛知県, 10, 29-56.
- 町田 真・太田陽子・田中真吾・白井哲之, 1962, 矢作川下流域の地形発達史, 地理評, 35, 505-524.
- 牧野仁 猛・小井土由光, 1988, 第5章第四系, 山下 昇・紺野義夫・糸魚川淳二編 日本の地質5「中部地方II」, 共立出版, 144-177.
- 松島義章, 1990, 愛知県刈谷付近の碧海層の貝化石, 神奈川県立博物館研究報告(自然科学), 19, 19-32.
- 森 忍, 1984, 愛知県碧南市地下における更新統のケイソウ群集, 環境化石博物館研究報告, 11, 93-99.
- 森山昭雄, 1994, 西三河平野, 碧海層の堆積構造と海水準変動, 地理評, 67A-10, 723-744.
- 森山昭雄・橋爪 厚・石原 秀, 1997, 化石ケイソウ群集による碧海層の堆積環境の変遷と油ヶ淵断層による変位, 愛知教育大学研究報告, 46 (自然科学編), 61-69.

b. 周辺の遺跡分布

御船城跡のある豊田市北部、矢作川右岸域における遺跡の分布（第3図）では、発掘調査による事例ではないものの、舞木・加納・御船・山ノ神などの地点から後期旧石器～縄文時代に属する尖頭器、ナイフ形石器、細石刃などの分布が確認されている。調査地点南東の丘陵に立地する御船遺跡から尖頭器が、また矢作川右岸段丘上の大釜遺跡では細石刃、石鏃等が採取されている。続く縄文時代の遺跡も調査例は少なく、石鏃をはじめとする石器類は、篠川上流域、篠川中下流域、伊保川上流域、矢作川上流域に散漫な遺跡分布が認められる。調査地点北西の御船川上流の地点には縄文前期を中心とした向イ原遺跡（藤岡町）があり、集落では船塚遺跡で竪穴住居、縄文中期土器、土偶等が、曾根遺跡でも中期の竪穴住居、石棒などが検出されている。弥生時代については東広瀬・猿投・舞木本地内亀首遺跡などで土器片の出土がみられるが調査例はなく詳細は未だ不明である。

矢作川水系の古墳分布状況をみると、勘八岐から平戸橋あたりを境として、上流域では本流付近に少なく、御船川・飯野川・犬伏川・田代川といった支流の流域にわずかに認められる。このうち御船川沿いの丘陵上や麓には口明塚古墳、滝1～4号墳、大釜1～3号墳など6世紀後半～7世紀代と思われる群集墳が点在する。中下流域では矢作川本流に沿う丘陵上に築かれるものが多くなる。中流域で合流する篠川流域には5世紀後半に遡る早い段階の古墳群が築かれており、弥生～古墳時代にかけての集落として亀首遺跡の存在が知られている。ただし、御船川流域では古墳時代の集落、古代の遺跡等は確認されていない。

篠川流域には奈良時代創建とされ、塔礎石が残る舞木庵寺が存在し、また周辺および伊保川を含めた冲積地一帯には、条里との関連が想定される地名及び景観が認められる。前代から引き続きこの辺りに開発の中心があったと想像される。篠川上流域の古窯址群を含むこの一帯は猿投山西南麓古窯址群の東端にあり、古墳時代須恵器～奈良・平安時代にかけての窯跡が多数分布し、窯業地域として継続して発展した。

c. 御船城跡の沿革

豊田市域に分布する中世城館跡の数は伝承のみの場合を含めて40ヶ所以上を数える。その分布は矢作川、巴川、逢妻女川の流域に比較的多く集中している。これらの形態は、山頂に築かれた山城や砦、山麓、平地の居館、それらの組合せなど多様であるが、御船城跡は矢作川の支流、御船川の流れる平坦地につくられた館跡と想定される。

南北朝以降戦国期にかけてこれらの築造の主体となったのは、国衆、国人領主など在地性の強い領主層であり、建長年間（1249～55）より参河国高橋庄を経営した中条氏の被官衆の中から、15世紀中葉にかけて台頭していく鈴木氏・三宅氏・那須氏、また高橋庄以外では松平氏や旧碧海郡を拠点とした戸田氏らが知られている。それぞれの影響が及んだ範囲は、鈴木氏が足助・酒呑・矢並・寺部を結ぶラインを軸に藤岡・小原にかけての地域、三宅氏は初めに伊保、そして東広瀬を本拠として御船、梅坪方面へ広がりをみせ、那須氏は八草から



南へ、松平氏は巴川東岸域に勢力を伸長した。

御船城に関する記述は、1470（文明二）年応仁の戦いで功のあった児島右京亮義明なる人物が御船、亀首、加納を領有し御船に館を構えた、とするのが始まりである^{*1}。この児島氏を三宅氏の祖とする伝承があるが、この間の系譜については錯綜しており正確なものは判然としない。1492（明応二）年に完成した猿投神社拝殿の棟札には「大施主三宅筑前守家次、作事奉行名備後守家吉、松嶋入道、大工右衛門大夫次清」と記されており^{*2}、この頃の三宅氏の隆盛がうかがわれる。三宅氏の惣領家居城としての広瀬城、南進の拠点梅坪城に関連する記述と比較すると、御船城に関するものは乏しく、その後は1564（永禄七）年秋、尾張・三河の戦乱の中、賊のために城郭が焼失し、城主三宅義高、その子義國ら市場村（保見町）で討死、義高の三男児島鎌太郎義光（七才）は僧となり千鳥寺第五世全鉢となる、とある^{*3}。一方で、1586（天正一四）年西広瀬村八剣氏神の棟札に「信心大施主御船三宅亀千代殿云々」がある資料が存在し^{*4}、少なくともこの時期まで三宅氏の居城があった可能性も否定できない。

註・参考文献

*1 1963『猿投町誌』『猿投村史』

*2 「農田市史」

*3 『千鳥寺旧記』

五世全鉢は後1615（元和元）年御船村円通庵庚申堂（現桂林寺）に隠居し移っている。

*4 『農田市史』

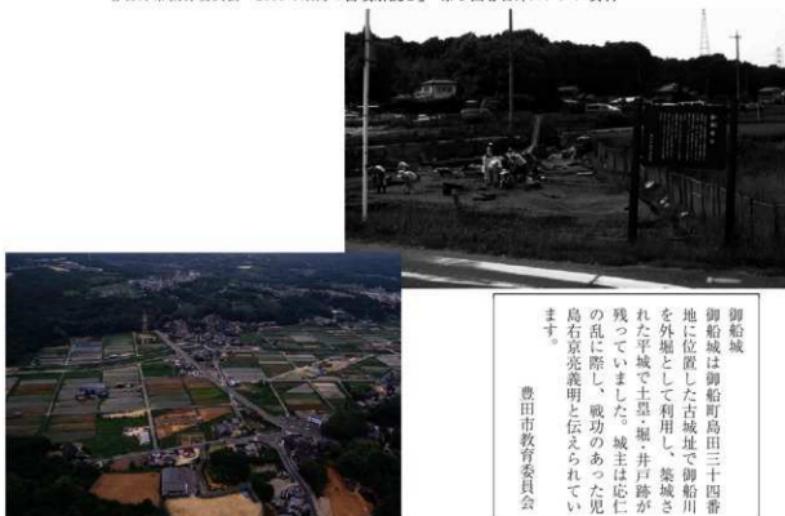
神谷 力・澤田 樹・鶴生静雄編 1985『御船町誌』

矢作川流域資料調査会 1993『矢作川流域資料調査報告書』

郷土出版社 1994『図説 豊田・加茂の歴史』上下

愛知県教育委員会 1995『愛知県遺跡地図 II 知多・西三河地区』

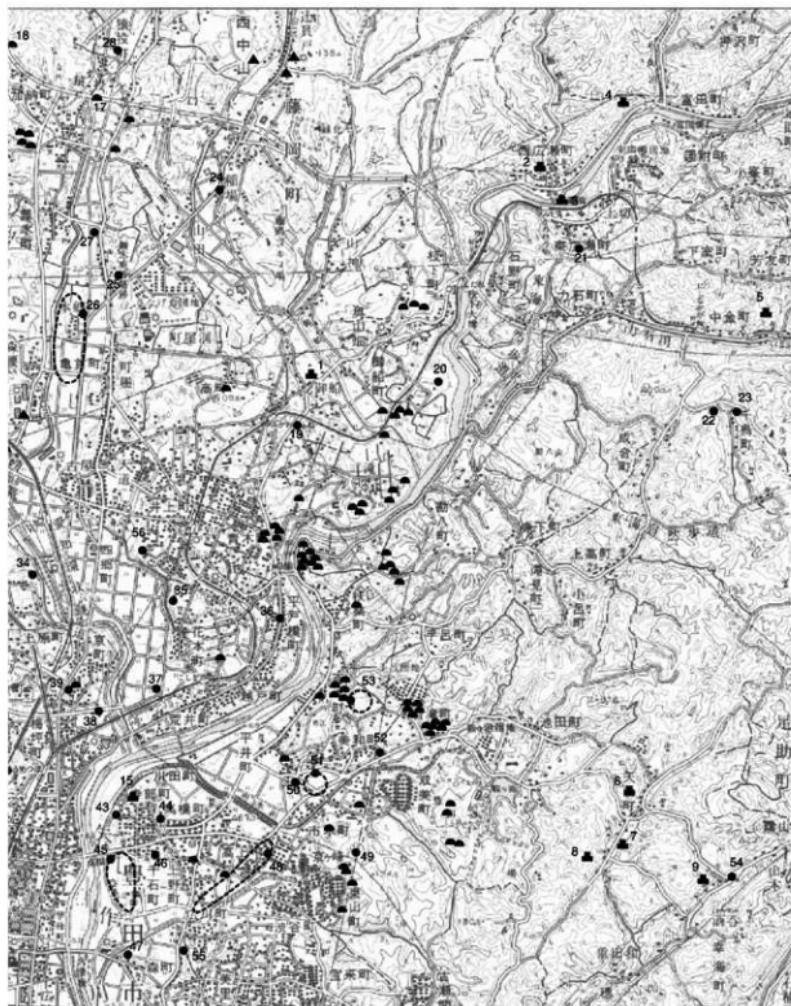
春日井市教育委員会 2001『東海の古墳解説2』 第9回春日井ジオパーク資料



御船城跡

番号	遺跡名	種別・時期
1	御船城跡	城館
2	西広瀬城跡	城館
3	東広瀬城跡	城館
4	広瀬城跡(岩吉城)	城館
5	中金城跡	城館
6	矢張上本城跡	城館
7	跡木西阿佐望城跡	城館
8	矢張下本城跡	城館
9	酒香陣屋跡	江戸
10	伊保古城跡	宝町城館
11	伊保東古城跡	宝町
12	伊保城跡	近世
13	伊保西古城跡	宝町
14	百ヶ沢田跡	城館
15	寺部城跡	宝町～江戸城館
16	宮口元星城遺跡	宝町集落
17	上ノ遺跡	古墳
18	寄光古墳	古墳
19	御船遺跡	旧石器散布地
20	大堀遺跡	旧石器散布地
21	高根下遺跡	旧石器、縄文散布地
22	千鳥西遺跡	旧石器散布地
23	千鳥東遺跡	旧石器散布地
24	向ノ原遺跡	縄文前期散布地
25	跡木廻寺	飛鳥寺院
26	龜山遺跡	弥生後期～古墳集落
27	跡木遺跡	古墳前期散布地
28	神野下遺跡	縄文後期散布地
29	大角豆洞遺跡	弥生中期散布地、古墳
30	坂越遺跡	弥生後期集落
31	大沢遺跡	古墳散布地
32	江古山遺跡	弥生～奈良集落
33	伊保遺跡	弥生、古墳集落
34	上原遺跡	旧石器、縄文散布地
35	宇津本山遺跡	中期散布地
36	太戸遺跡	奈良散布地
37	船岡遺跡	縄文中期～平安集落
38	梅坪遺跡	弥生～中世
39	京町遺跡	旧石器、縄文散布地、中世墓
40	四郷西山遺跡	弥生後期散布地
41	靈岩寺山遺跡	旧石器散布地
42	井山遺跡	縄文晚期散布地
43	寺部遺跡	縄文晚期散布地
44	八幡社遺跡	縄文中期散布地
45	千石遺跡	奈良散布地
46	不動堂前遺跡	弥生～平安城館
47	曾根遺跡	縄文中期集落
48	高根遺跡	弥生～平安集落
49	京ヶ峰山遺跡	弥生墳墓
50	堂外山遺跡	古墳散布地
51	沖田遺跡	縄文中期～縄文散布地
52	跡耳太東遺跡	弥生～古墳集落
53	岩長遺跡	縄文～古墳集落
54	酒香ジユリンサ遺跡	旧石器散布地
55	南山遺跡	弥生～古墳集落
56	井上遺跡	縄文晚期散布地





第3図 豊田市北部地域の遺跡分布 (S=1/50,000)

第2章 遺構

1 基本層序

調査地点は、遺跡北東方向の御船川に向かって傾斜する緩やかな段丘上に開かれた水田耕作地となっている。御船川より離れるにしたがって標高は高くなり、A区は水田耕作土も薄く、鉄分の集積としてみられる床土層もほとんど形成されていない。B区では複数の水田耕作土層が確認され、また一部でベース直上に暗褐色～黒色の粘土層の堆積がみられた。標高の低いC区でもB区と同様に複数の水田耕作土層と暗褐色粘土層が確認された。ここではベースが疊層となっている。(第5図)

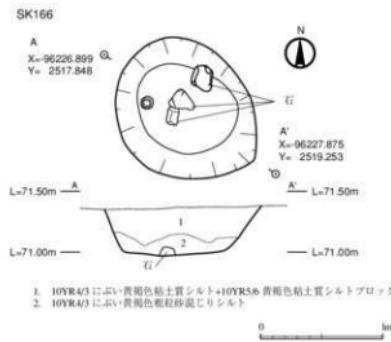
2 A・B区

A区では明確な包含層は確認されず、遺物は水田耕作土から検出した。昭和50年代に圃場整備される以前の旧耕作地区画の痕跡(溝、杭列、畦畔など)のほか土坑、ピットなどがある。土坑SK166(第4図)は径1.2m、深さ約40cmあり、黄褐色粗粒砂混シルトを埋土とする最下層で拳大の石と古瀬戸後期III段階の縁軸小皿1点(130)を検出した。皿は底部が丸く欠損して抜けしており、底部片は検出されなかった。その他、疎らに分布するピットから遺物は検出されず、また建物を想定できる配置、規模ではなかった。近代～現代の耕作に伴うものであろう。

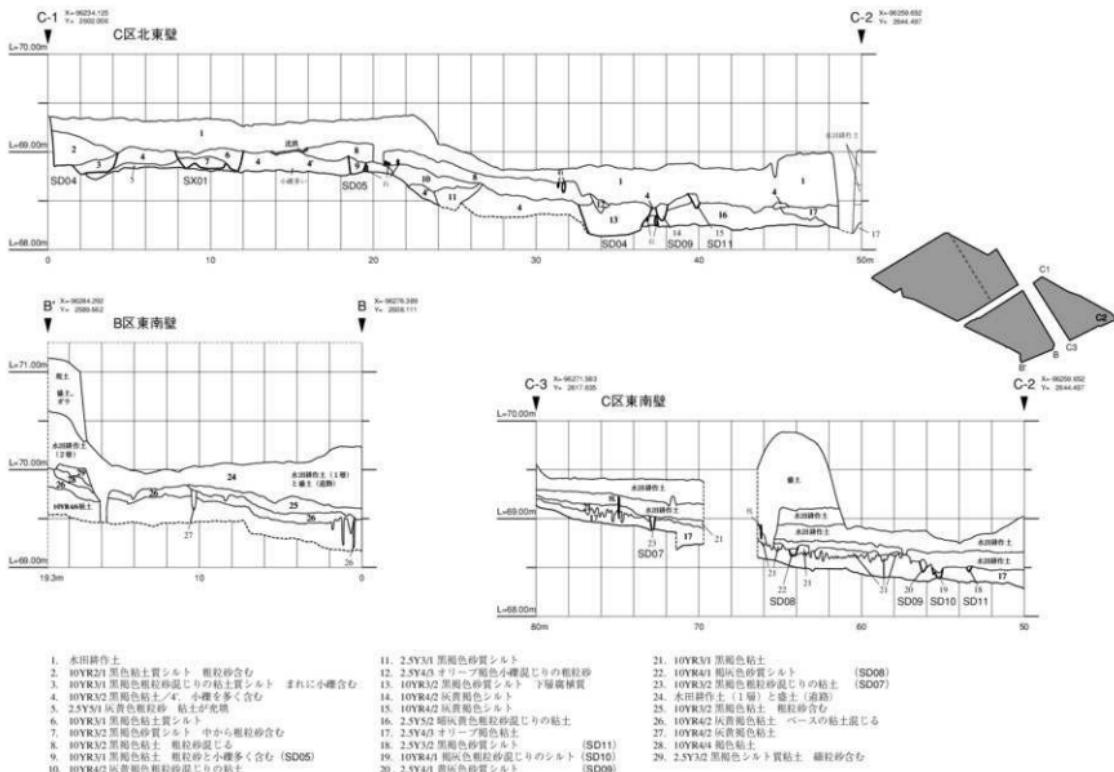
B区は現況で上下2段の水田となっており、上段はA区と同じくI層とIII層のみ、下段水田では層厚10cm前後のII層の堆積がみられ、ここから陶磁器、土師器皿等の細片を検出した。また、ベース面ではやや赤味を帯びた粘土の範囲を長楕円形の土坑として掘削したが、いずれも出土遺物は無く規模も一定せず、断面に於ても堆積状況が不明瞭であったため、人工的な造構ではないとの認識に至った。

3 C区

C区は今回の調査範囲で最も東に位置し、御船城跡の推定範囲に最も接近する。調査前は水田耕作地であったが、東端にむかうにつれて水深が深くなりガマ等が繁茂していた。水田耕作土は調査区東端寄りで部分的に2層を確認した。水田耕作土には中世・近世の陶磁器片などが混じる。ただし、A・B区に比べ陶磁器の破片はやや大きく、出土量も比較的多い。耕作土を除去したベース面で近代から現代の溝が検出される状況にあり、近世以前の遺構としては大型の溝と土坑、ピット数基が確認されるにとどまった。

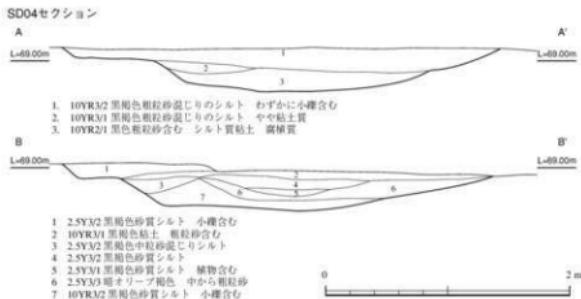


第4図 01A区 SK166 平面・断面図(1/40)

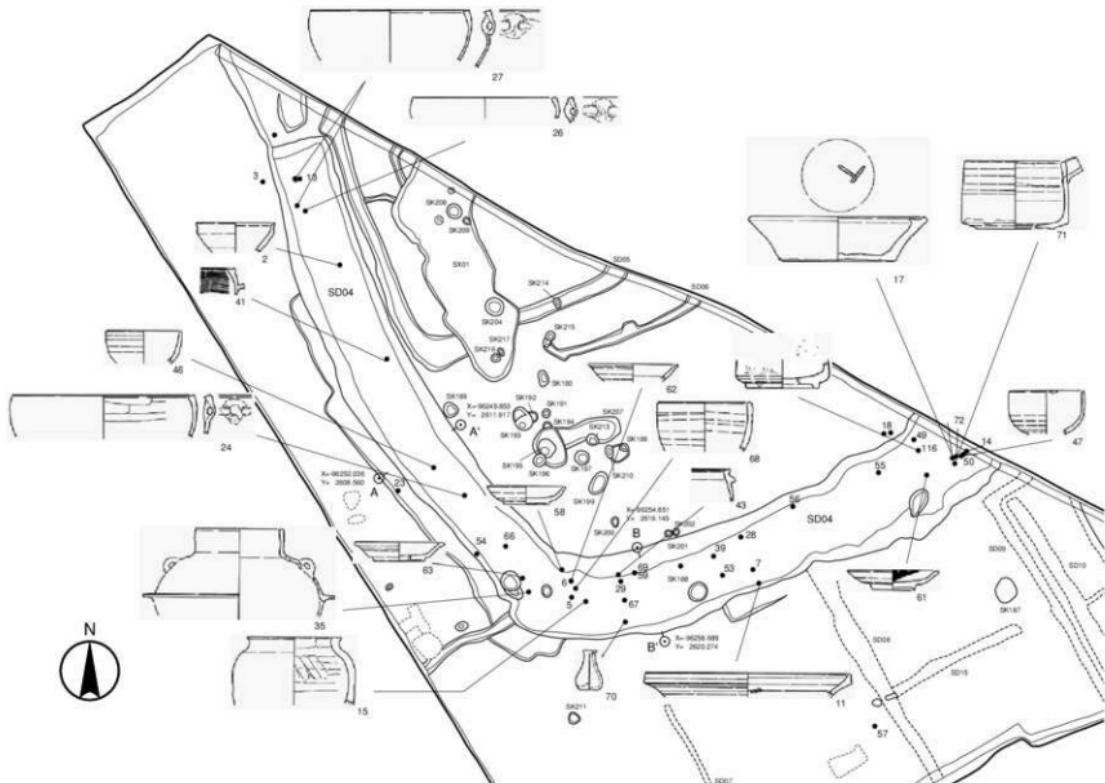


第5図 01B・C区土層断面図（縦S=1/50、横S=1/300）

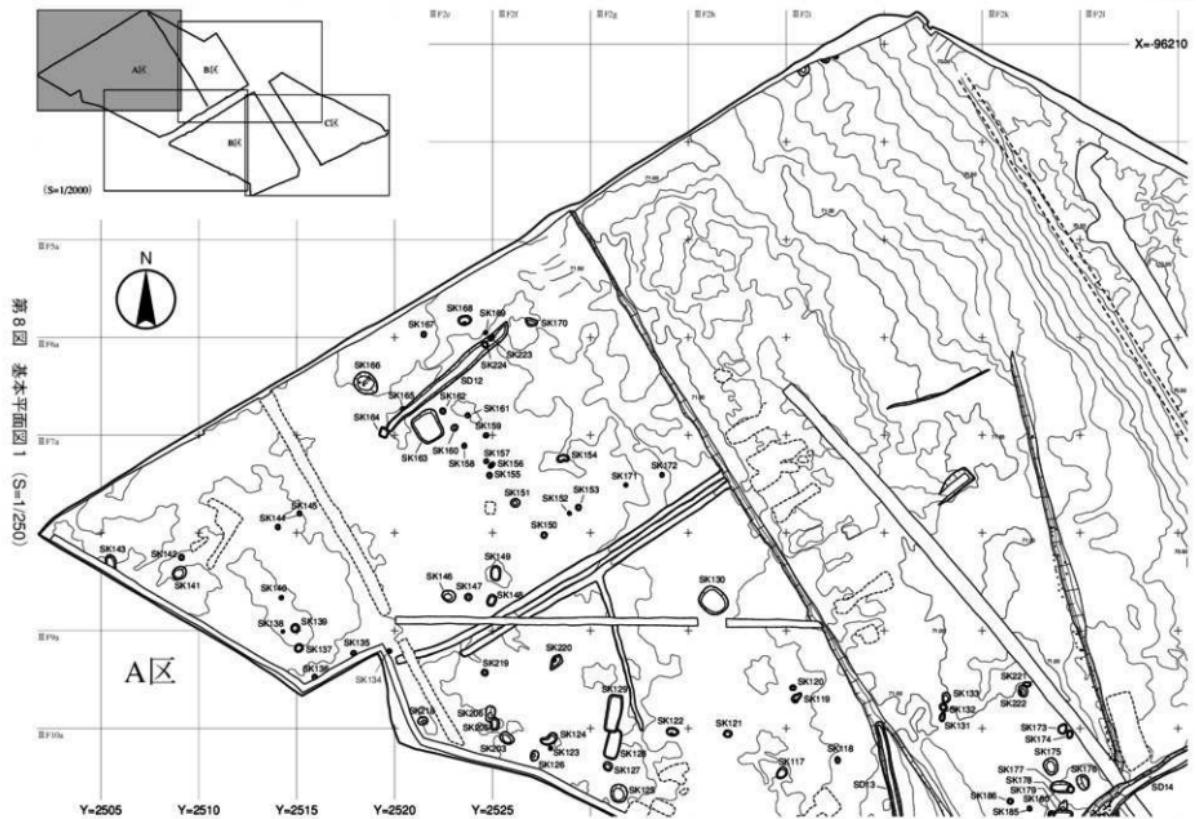
- C 区 SD04** SD04 L字に屈曲する溝であり、調査区では北西から南東方向へ約24m、ほぼ直角に屈曲して北東方向へ約20mの部分を確認した。北西・南東の辺は幅約3.5m、深さ40cm、南西・北東の辺は調査区壁際で幅3.7m、深さ60cmを測り、現在の集落のある丘陵からの傾斜に沿う方向、C区東端にむかって幅、深さともに若干拡張している。断面は浅い皿状であり、西側の一部は拡張されテラス状を呈する。埋土は上層は小礫が多く含む黒褐色シルト層、下層も僅かに小礫と、腐植質を含む粘土質の黒褐色シルト層となる。堆積層に明瞭な砂層は含まれず、ここでは流量が少ない常時澱んだ水が湛水していたものと推測される。また、北西・南東辺の北寄り部分で、ベース黄灰色粘土層を掘り残したとみられる痕跡があり、この地点に土橋状の浅い部分を形成していた可能性がある。第7図に主な出土遺物の分布を示した。陶器片は層位で明瞭に区分できなかつたが、傾向として下層では土師質鍋釜類が、近世陶磁器類が疊とともに主に上層で検出された。
- C 区 SD05** SD05 SD04の方針と一致し、平行して伸びる幅60cm、深さ20cmの溝。埋土はシルト質で疊は比較的少ない。出土遺物は灰釉端反皿（121,122 大窯1段階）。
- C 区 SX01** SX01 溝SD04による区画内部に広がる、不定形の落込みである。幅は最大で2.7m、長さ8.5m、深さは10～15cm程度あり、粘土質の強い埋土には小石、疊が大量に含まれる。疊層の中に近世陶磁器片が比較的多く含まれたが、廃棄とおぼしき集積や炭化物等は認められなかつた。
- C区SD04周辺においてピット状の土坑数基を検出したが、明瞭な建物跡の復元には至らなかつた。規模の類似するSK204,208,195は同一線上に近く、各々の距離は4.2m、5m。
- C 区 SK204** SK204 SX01の疊混じりの埋土を除去した面で検出した。径約70cmの円形、深さ75cm。遺物はなし。
- C 区 SK208** SK208 SK204と同様、SX01の疊まじりの埋土を除去した面で検出した。径約60cmの円形を呈し、深さ46cm。ベース疊層を掘り込み、埋土は暗褐色粘土である。最下層から板状の花崗岩2片を検出した。表面は凸凹が激しく、明瞭な加工痕はみられない。
- C 区 SK195** 疊を多く含む暗褐色粘土を埋土とする。幅1.6×1.2m、深さ10cmの円形を呈し、その西寄りに75mm×65cm、深さ52cmのピット状の落込みがある。遺物は天目茶碗（92）、半球形内耳鍋（84）、数枚が溶着した灰釉系陶器碗（90）、砥石（149）がある。

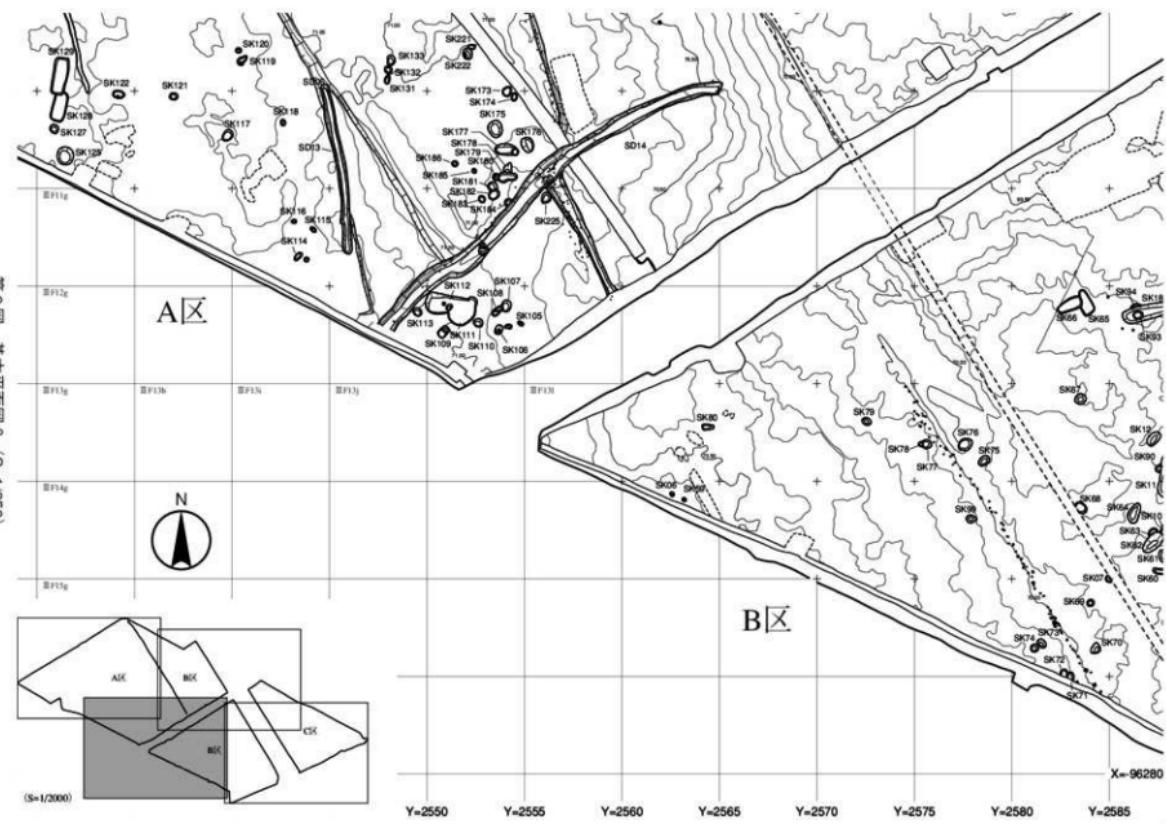


第6図 01C区 SD04 土層セクション (1/40)

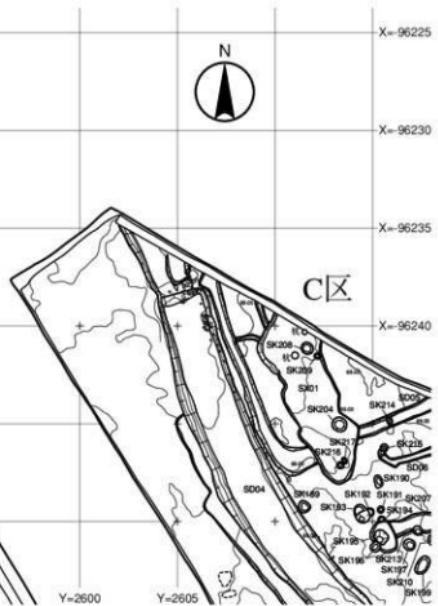
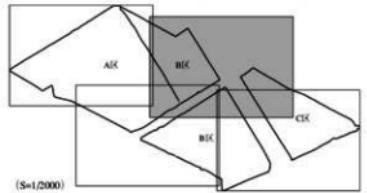
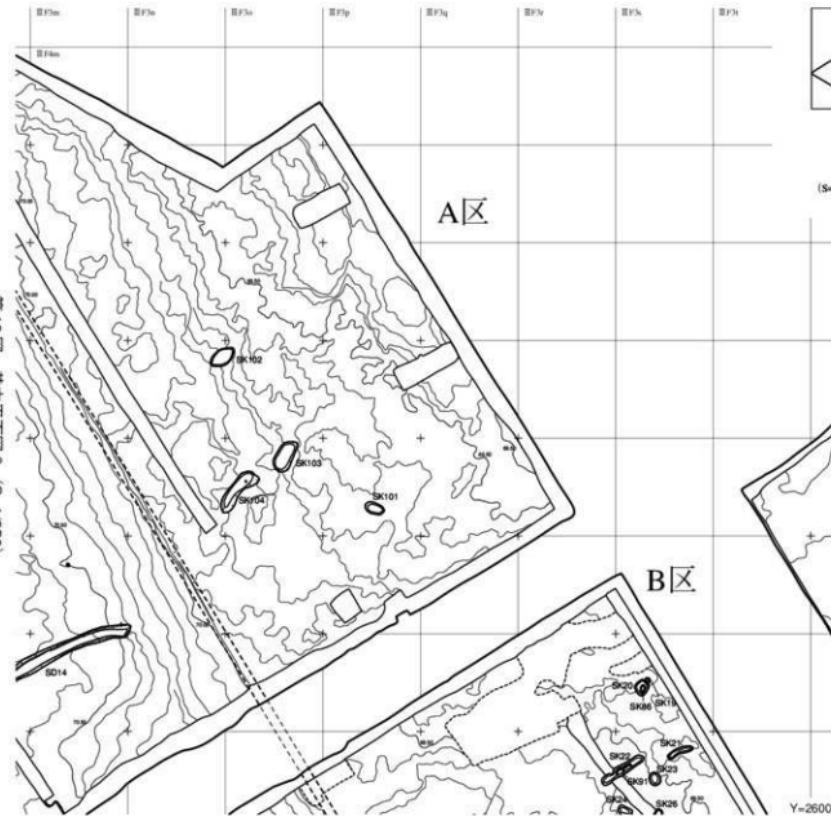


第7図 01C区 SD04出土遺物の分布（遺構図 S-1/200）

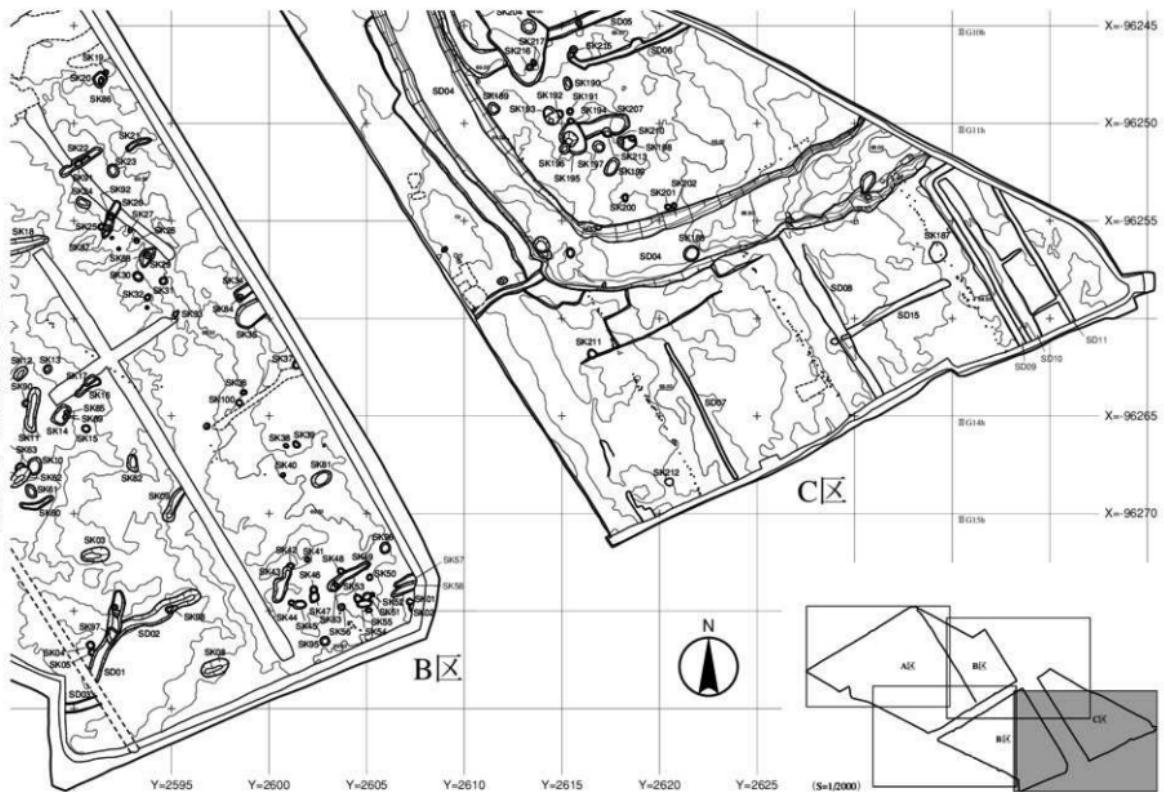




第10図 基本平面図3 (S=1/250)



第11図 基本平面図4 (S=1/250)



第3章 遺 物

調査範囲全体で遺構の残存状況は良好ではなく、陶磁器類は水田耕作土層で検出された細片が多くを占める。最近では昭和50年代の圃場整備の際の改変により大きく削平を受けしており、また耕作土の移動により二次的に持ち込まれた可能性についても考慮する必要がある。ここでは01C区の溝SD04出土資料を中心に扱いつつ、出土傾向を示す資料として包含層出土遺物も採用し掲載することにした。

1 土器・陶磁器類

a.C区溝 SD04

中世 濑戸美濃産陶器

古瀬戸後IV期～大窯I段階では天目茶碗(3)、腰折皿(4)、端反皿か丸皿(5)、鉄釉鉢(8)、耳付水注(7)、祖母懐茶壺(10)、擂鉢(11,12)、灰釉盤類などがあるが出土遺物全体に占める割合は小さい。大窯3～4段階も資料点数は少なく、天目茶碗(1,2)、志野丸皿(6)、擂鉢(13)がある。擂鉢類はすべて内面および底部に使用による摩滅が顕著である。大窯期の匣鉢(9)は内面中央付近にかけて煤が付着している。その他にわずかであるが藤岡町近辺の窯で焼成された灰釉系陶器碗(山茶碗)、小皿がある。以上の資料の大半は細片であり、接合できたものは少ない。

常滑産陶器

常滑産製品は少量であり、大型の壺・甕類が検出されていない。16世紀後半と思われる小型壺(15)がある他に軟質焼成で黄褐色を呈する浅鉢(17)、薄手で口縁部を内側へ折返した鉢がある。17は蓋受けがつき内面には「T」字状のヘラ書、見込と蓋受け部分に煤が付着している。18世紀後半の資料として蓋受けの無いタイプが名古屋城三の丸遺跡で出土している。

土師器

土師器皿(18～22)は軟質で表面が摩滅しており、調整や使用痕の詳細は不明である。胎土は精良で淡い灰褐色を呈する。18のみ非ロクロ製品であり、径10.6cm、その他は底部に回転糸切痕を残すロクロ土師器である。ロクロ土師器皿は口縁部が残存しておらず、底部径は3.4～6.9cm程度。包含層よりもSD04に比較的多く含まれており、SD04資料は残存率のやや高い、大きめの破片で検出される。

土師質鍋釜類が、今回の出土遺物の破片数では多くを占めている。集中する範囲は明瞭ではないものの、SD04西部にかけて分布する傾向がある。これらの外面に煤が大量に付着しており使用痕が明瞭であるものが多い。半球形内耳鍋(24～32)の口縁部は若干内傾し、端部にかけて器壁が肥厚する。外面は指オサエまたはナデ調整。上位を周囲ナデ(31,32)するものがある。内面の上位はハケ調整、口縁すぐ下に付く一对の内耳は径3～3.5cmの半球形の粘土塊を綴位に貼付けている。内耳部分の器壁は外に押し出され、やや下方に引っ張られている。底部まで復元できる資料はないが、底部片(33,34)は外面ケズリ調整、三足が付ぐものが含まれる。羽付釜(35)の口縁部は直立し4cm前後と高く、やや古い様相をみせる。内

外面ナデ調整で外耳は粘土紐を継ぎに取り付けるタイプと思われる。羽付鍋(36~45)は、いずれも口縁端部にかけて器壁が肥厚し、緩やかに内彎するもの(36~41)、鋤が極端に短く痕跡程度に退化しているもの(42,43)、鋤が短く、口縁部から直線的に体部に続くもの(44,45)がある。外面は周囲ナデ、内面上位ハケ調整。外面鋤以下に厚く煤が付着する。年代観の特定は困難であるが、半球形内耳鍋は16世紀後半を中心とした時期、羽付釜は口縁端部から鋤までの距離、鋤の長さ、形状にバリエーションがあり、15世紀後半~16世紀初めの時期と思われる。16世紀代資料が主であり、42,43は17世紀代に入る時期と思われる。

近世（瀬戸美濃産陶器）

破片が多く目立つ土師質鍋釜類に次いで、連房式登窯製品が出土遺物の主体を占める。ただし、連房式登窯の初期から第8.9小同期まで断続的に各時期のものが含まれている。天目茶碗(51,52,54)、小天目(53)、丸碗(46,47,50)、志野丸皿(58,59)、灰釉輪禿皿(61)は縁掛け流し、灰釉反り皿(62~64)、灯明皿(57)、擂鉢(65)、煙硝擂(55)、鉄軸片口(68,69,71,72)は時期の異なる2タイプがあり、鉄釉壺(67)、小瓶(70)などがある。使用痕の明瞭な個体も多く、煙硝擂内面の摩滅は顕著である。

b. SD05・6

SD05では大窯1段階の灰釉端反皿(121,122)がある。2点は口径16cm、17.9cmあり、両者とも一般的なサイズよりひとまわり大きい。121の高台内には輪トチが熔着している。SD06の羽付鍋(123)は口径34cm、断面四角形の短い鋤が付く。

c. 包含層出土資料

遺構外の包含層出土遺物はC区に集中し、A、B区は希薄でありしかも細片である。灰釉縁小皿(130)はA区SK166の土坑底で検出した。底部を丸く欠損している。古瀬戸後期III段階の資料。土坑出土遺物はA、B区でこれ1点のみである。古瀬戸中期~後期半までの時期では天目茶碗(124,125)、小天目(126)、灰釉縁小皿(129)、灰釉小鉢(127)、擂鉢(136)、盤類(133,134)、中期と比定される灰釉合子蓋(128)がある。連房式登窯の時期では4小期~11小期までの資料が含まれ、碗(132)や美濃の製品では灰釉反り皿(131)、土瓶(137)、練鉢(141)がある。土師器皿も少量あり、すべてロクロ使用である。その他に土師質の管状土鉢(142)、青磁碗(143)各1点がある。

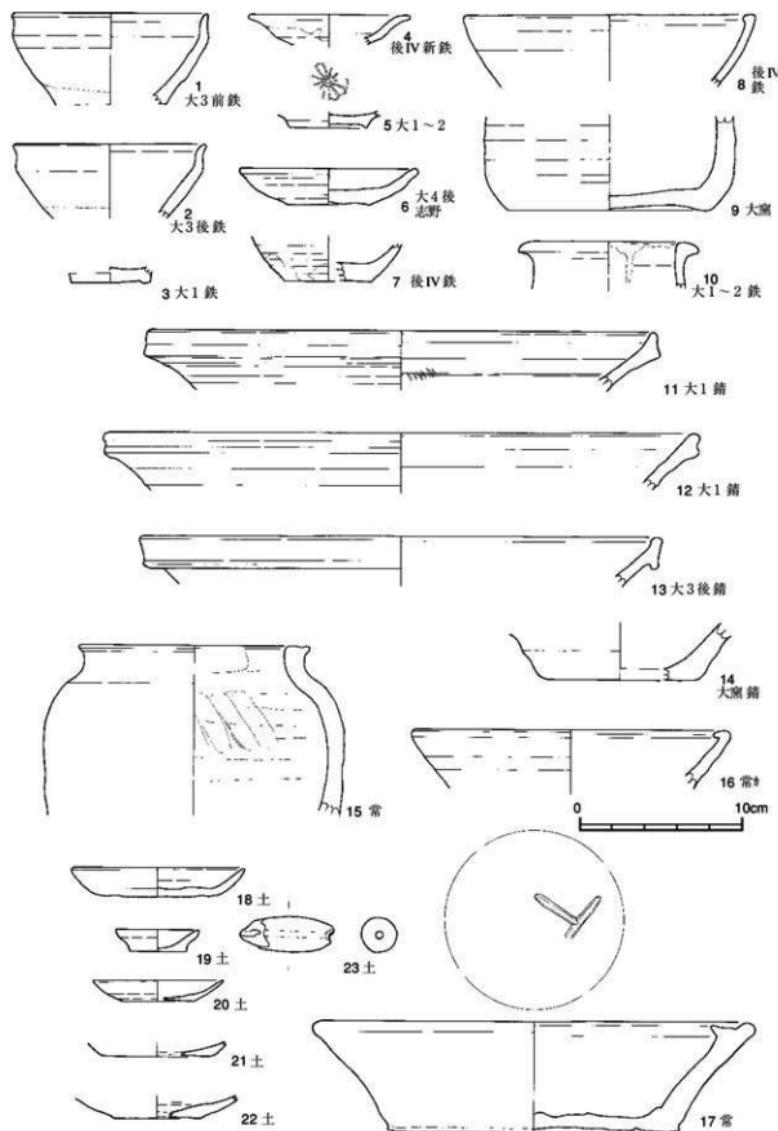
C区包含層出土資料では少量の古瀬戸~大窯期製品のほか、連房式登窯1小期~8小同期の資料、土師器皿、土師質内耳鍋、常滑産製品などがある。SD04と比較して陶磁器類はほぼ同様の時期別の分布傾向が看取されるが、土師質鍋釜類は少なく、また破碎されており小片を確認するに止まった。

その他には、製品ではないが、藤岡地域で生産された灰釉系陶器椀の熔着したものがある。145は須恵器杯(0-10)。146は瀬戸産磁器、レンゲ。147は陶製のボタン。戦中の統制下で瀬戸市内で生産された指定代用品。148は分銅の錘。

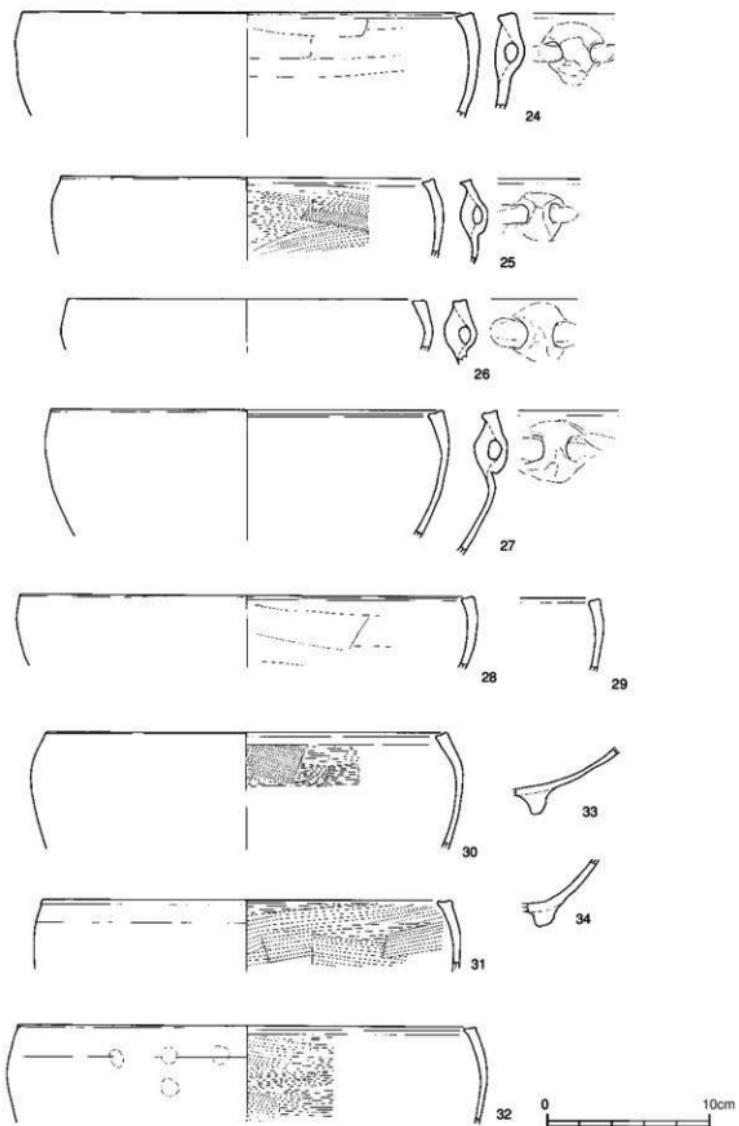
参考文献

- 梅本博志編 1990『名古屋城三の丸遺跡(II)』愛知県埋蔵文化財センター
- 金子健一編 1992『名古屋城三の丸遺跡(III)』愛知県埋蔵文化財センター
- 東海考古学フォーラム 1996『鍋と甕そのデザイン』第4回考古学フォーラム大会資料集
- 瀬戸市歴史民俗資料館 2001『〈代用品〉としてのやきもの』企画展図録
- 藤澤良祐 2002『瀬戸・美濃大窯編年の再検討』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要
- 瀬戸市 1998『瀬戸市史 陶磁編六』

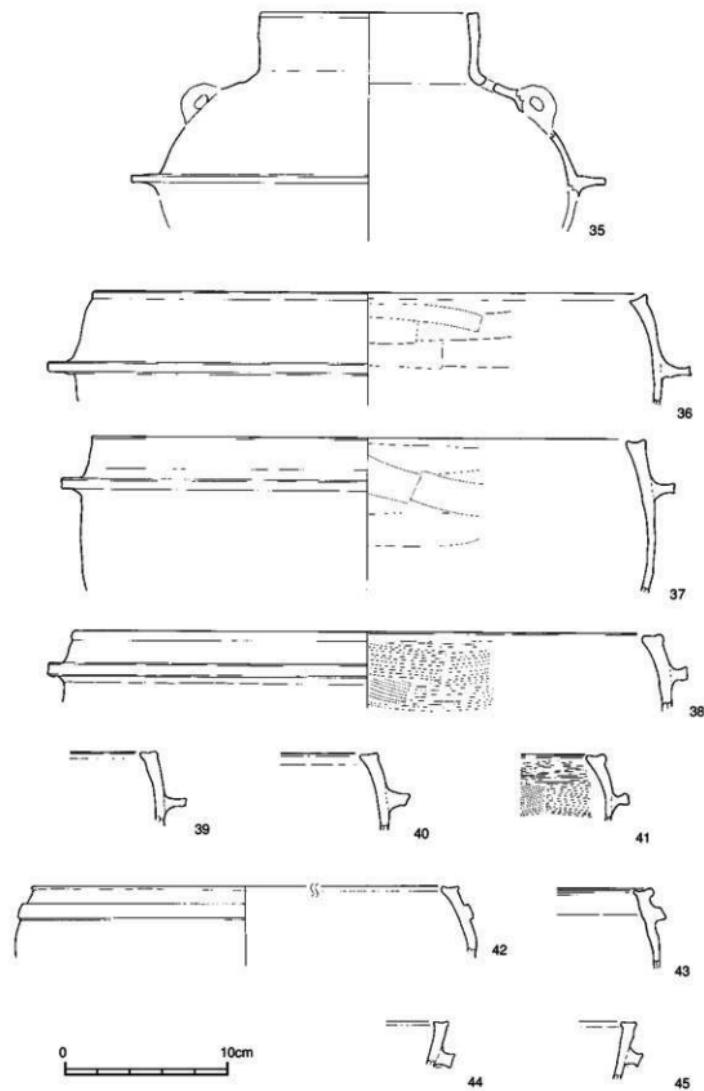
御船城跡



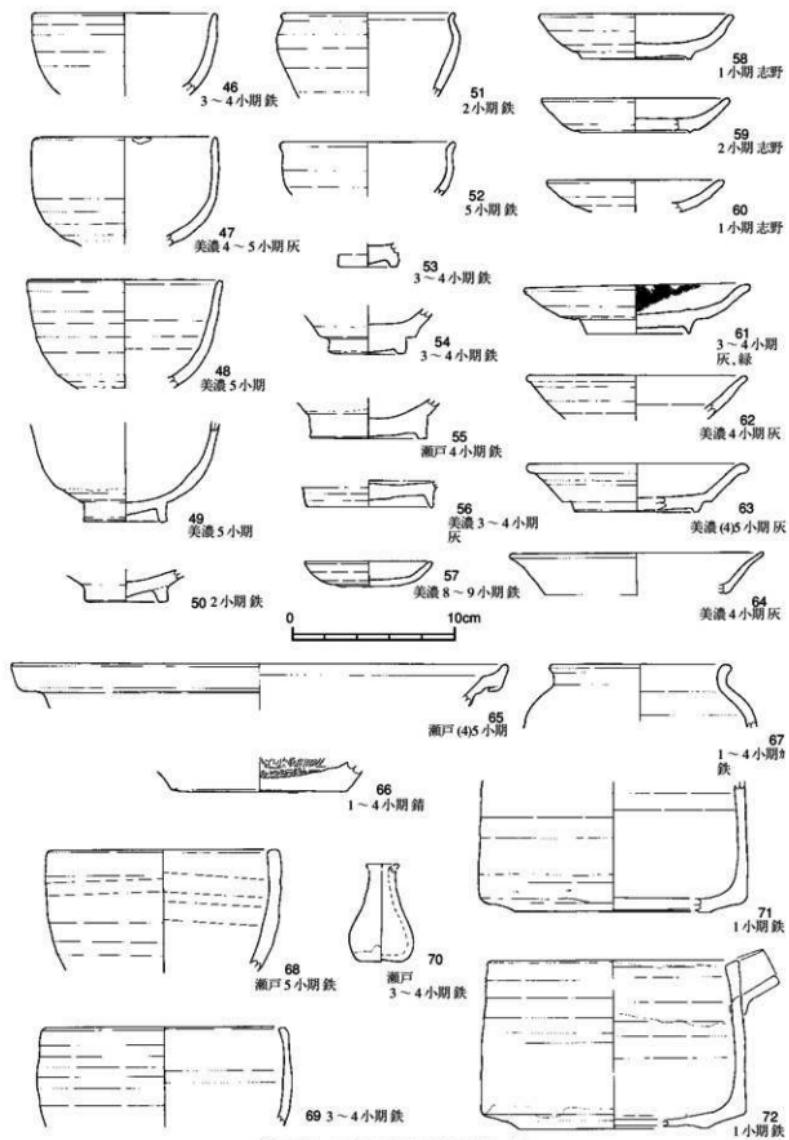
第12図 01C区 SD04出土遺物 (1)



第13図 01C区 SD04出土遺物（2）

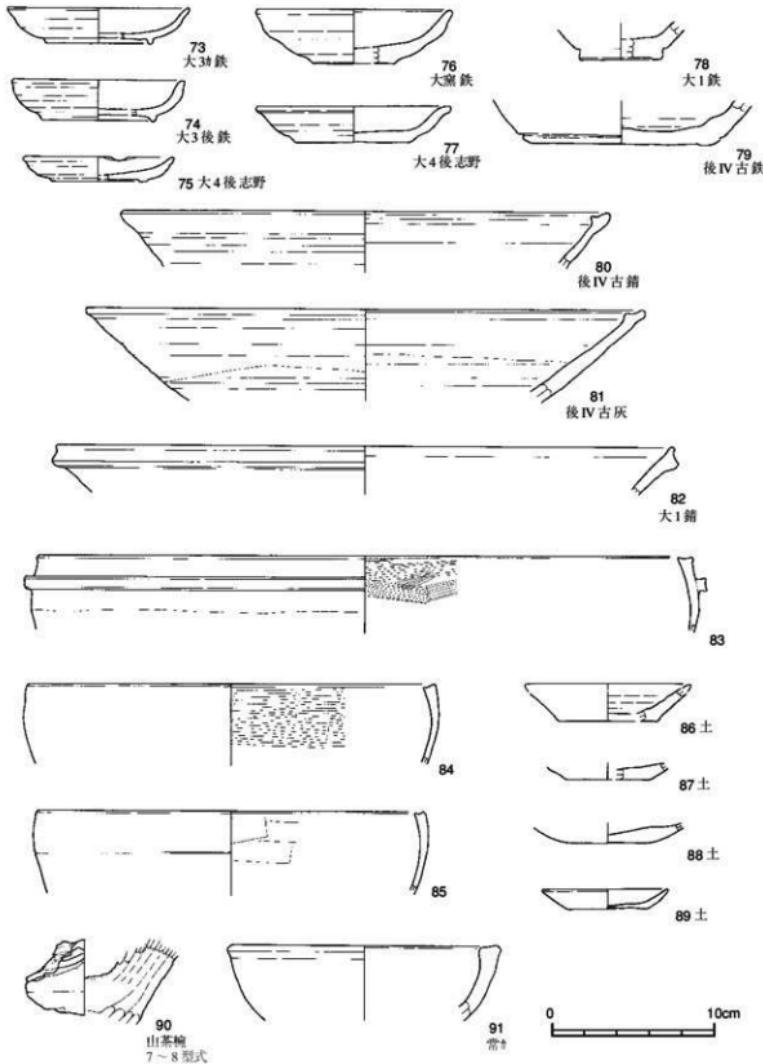


第14図 01C区 SD04出土遺物 (3)

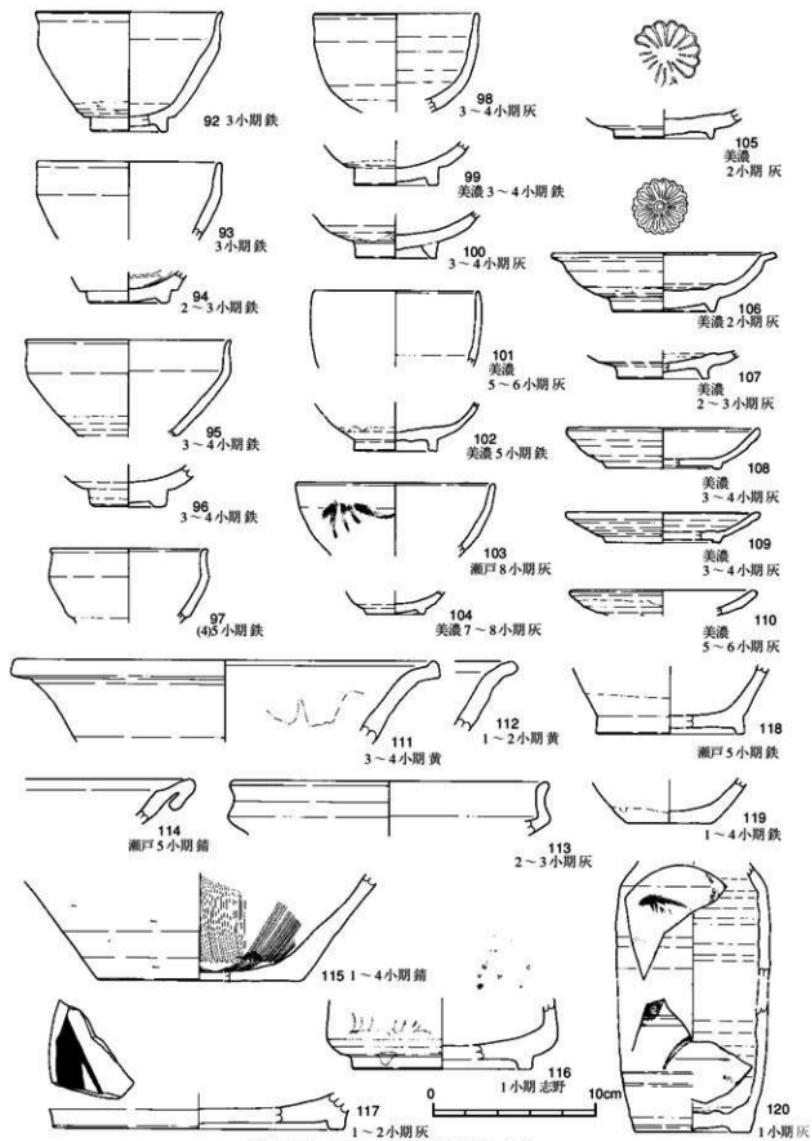


第15図 01C区 SD04出土遺物 (4)

御船城跡

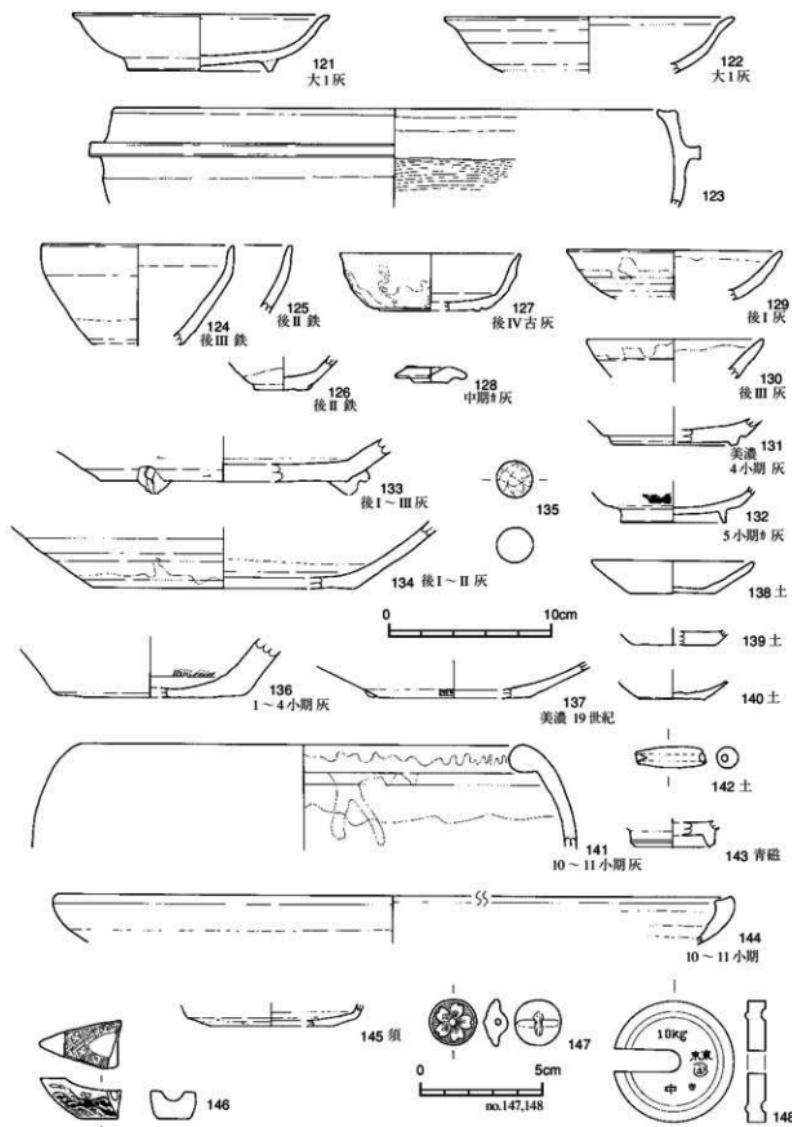


第16図 01C区 包含層出土遺物 (1)

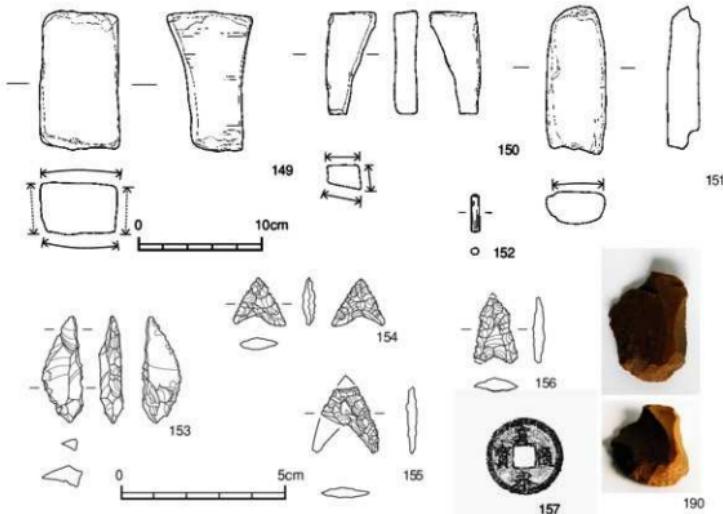


第17図 01C区 包含層出土遺物 (2)

御船城跡



第18図 01C区 SD05,06 01A・B区出土遺物



第19図 石製品・その他

2 石製品・その他

砥石は3点ある。149はSK195から天目茶碗、土師質内耳鍋と併に出土した。石材は凝灰岩で、バチ形を呈し、4つの研磨面がある。150は水田耕作土層から出土しており、研磨面は3つ、石材はホルンフェルス。時期は近代まで下る可能性がある。151は不明石製品。石材はホルンフェルス。砥石としては形状が不適当であるが、1面のみ明瞭な研磨面が認められる。

石器では、ナイフ形石器1点、エンドスクレーバー1点、石鎚5点があり、その他にチャート剥片数点が出土した。すべて中世以降の遺物を伴う包含層中の混入として検出されたものである。ナイフ形石器（153）は、長さ3.3cm、幅1.23cm、最大厚0.69cm。石材は灰色のチャートである。石鎚はすべて無茎石鎚であり、基部抉りの大きい三角形、抉りが小さく、先端付近に稜をもつ五角形などの平面形態である。154は長さ1.46cm、幅1.64cm、厚さ0.39cmで0.66g、チャート製。155は先端部と下半部を欠損しているが、残存部で長さ2.1cm、幅1.8cm、厚さ0.3cm、0.79g、チャート製。156は残存部で長さ2.0cm、幅1.35cm、厚さ0.38cm、0.94g、チャート製。190はエンドスクレーバー。長さ4.5cm、幅2.95cm、22.75g、石材はチャート。

銭貨は包含層から2点が出土したが、1点は残存状況が悪く判別できない。157は「寛永通寶」。

第4章 まとめ

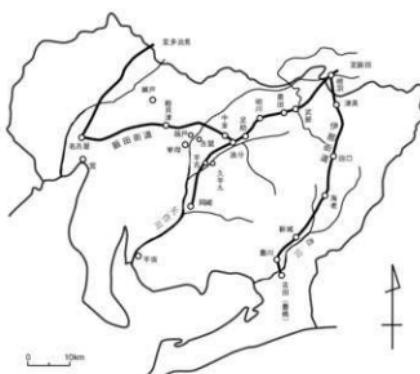
伝承「御船城」は、15世紀以降中条氏の被官衆から勢力をのばし、現豊田市北部地域一帯を領有した国衆あるいは国人領主といわれる地付の武士、三宅氏一族の城館である。御船には応仁の乱ののちの1470年以降に城館が置かれ、1564年の焼失するまで存続していたとされる。地籍図等により城館の規模は土塁・堀で開まれた一辺約50m前後の空間をもち、その中心は調査範囲外の北方にあたると推定される。

発掘調査では城館の時期に重なる遺構としてL字状に曲がる溝を検出した。矩形に曲がるC区SD04は単なる用排水路としては不自然であり、戦国期～近世の陶器類、特に土師質鍋釜類を埋土下層に含むことなどから、ある時期、近接して居住域が展開していたと思われる。城館跡の南側に推定される「大手門」からすぐ西へ進んだ一角に相当し、溝の形態から堀としての機能に疑問は残るもの、城館推定地付近の旧地割の方向とほぼ一致することから、屋敷地に開わる区画溝の一部であったと想定される。出土遺物では17世紀半ばまで継続が認められるが、土師質鍋釜類等の一定量の出土から、居住域としての占地が16世紀代に遡る可能性を指摘しておきたい。

さて、中世城館の分布、位置関係の中で御船城跡はどのような役割が想定されるのであろうか。中世城館の多くは交通の要衝をおさえ、また主要な交通路に近接して築かれている。調査地点のすぐ東を通る県道脇には常夜灯の石塔が残っており、ここは近世の街道、飯田街道に面していたと推定される。名古屋方面から四郷・御船・足助を通り、伊那谷南部の根羽・平谷・浪合を経て信州飯田に通じるルート、「飯田街道」がこの近辺村々の在りようによく影響している。

近世段階の幹線道であり宿駅制度が整備されていた中山道に対して、名古屋あるいは岡崎から足助へ経由するもの、吉田（農橋）から新城、津具を経由する伊那街道が太平洋側から信州へ向かう「脇往還」として主な道筋であった。信州中馬、三州馬が塩をはじめとした様々な物資を運び盛んに往来したことから中馬街道とも呼ばれたが、時代によって、あるいは地点によって街道の呼称は異なり、明治以降には名古屋から足助・根羽を経て飯田に達する道＝「飯田街道」が定着したようである。

御船城跡は矢作川上流域右岸に位置し、ここ上流域には古来より街道が矢作川を越える「船渡し」が各所に設けられた。上流から藤沢・富田・広瀬・枝下・越戸の5ヶ所があり、このうち最も重要な渡しが、遺跡北東方向の約2kmの地点にある「枝下の渡し」であった。通行も多かったため東枝下村・西枝下村の船渡しについて度々紛議となつたようだ、文化11年(1814年)両村の取替し証文が残っている^{注1}。また、明治以降の路線変更の記録によれば、明治12,13年頃に御船村字



第20図 主要街道模式図

大釜にあたる筏の難所「猪渡し」のすぐ下流に、木造の「大釜橋」が架設される以前には、数キロ上流の「枝下の渡し」がやはり主要なルートであった。江戸末から明治初年にかけて街道が最も賑わった時期には、御船にも問屋があり、四郷・殿貝津・上伊保には荷運場宿屋があったという。

調査において人々の生活の痕跡が認められたのは16世紀後半～17世紀前半を中心とした時期であった。南北朝末～戦国期にかけて、三宅氏の主家は矢作川上流の東広瀬を本拠とし、のちに南下して梅坪まで勢力を延ばしており、御船はその中間に位置している。御船城の立地は防御の点からみて必ずしも適当とはいえない立地である。にもかかわらず、この地点が領主館に選択された理由の一つとして、物資の集散地としての渡河点を含む「道」の掌握が強く意識されていたことが想定される。また、このルートの重要性が城館が置かれたとされる中世末の段階に遡ることを裏付けるものであろう。

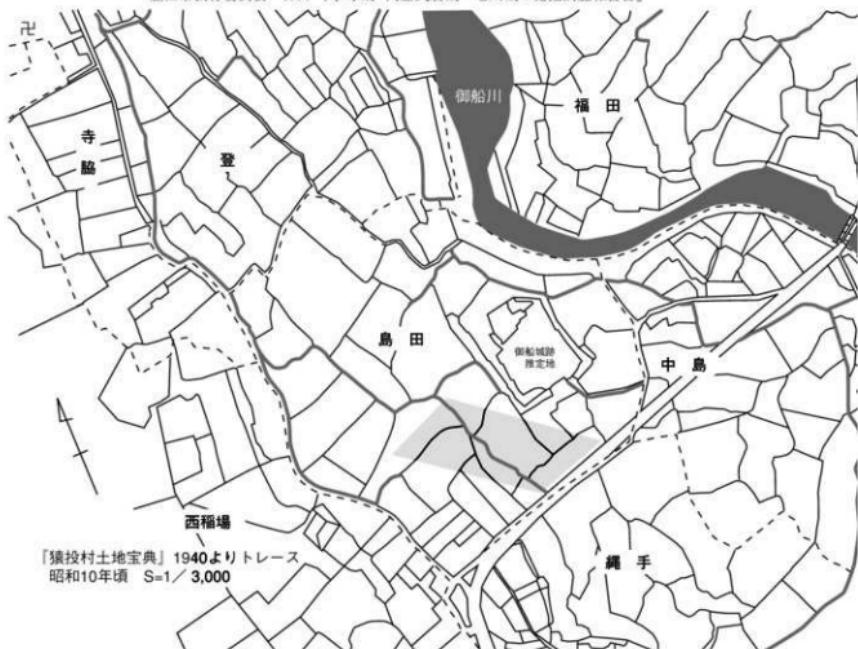
註・参考文献

*1 1968『猿投町誌』「一、信州中馬之外、から馬にても四疋より外相互に決面のせ申間敷候事」など数箇条の取決めが記されている。

1976『豊田市史』一

1978『豊田市史』三

豊田市教育委員会 1997『挙母城・内藤氏居城・七州城の発掘調査報告書』



第21図 周辺地籍図（薄いトーンが調査範囲）

◆PL.1



調査区全景（空撮写真合成）



左上 A,B区遠景（南西から）
左中上 B区全景（北西から）
右上 A区全景（東から）
左中下 B区東南壁セクション
B区北壁（黒色土層下は低位段丘疊層）
右中上 B区SK08
右下 A区SK166 古瀬戸縁釉小皿出土状況



御船城跡

◆PL.3



左中 SD04 東南辺セクション

右中 C区遠景
(調査区左側に御船城跡石碑が立つ)



左下 C区 SD04 南西辺完掘状況

右下 C区 SD04（調査区北壁）





左上 C区SK195

右上 C区SK208

左中 遺跡遺景（北東から）

右中 C区SD04検出状況

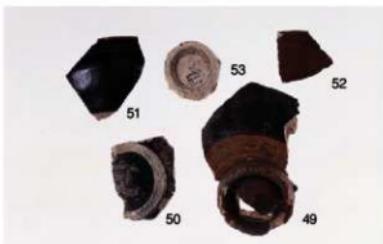
左 C区掘削作業風景



157

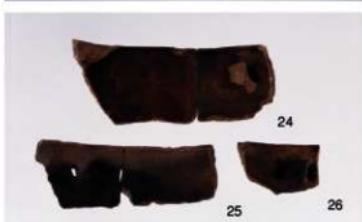


◆PL.5





121

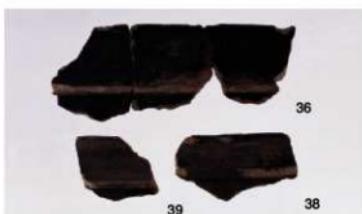


24

25

26

27



36

38

39

40

17



41

42

43



59



61

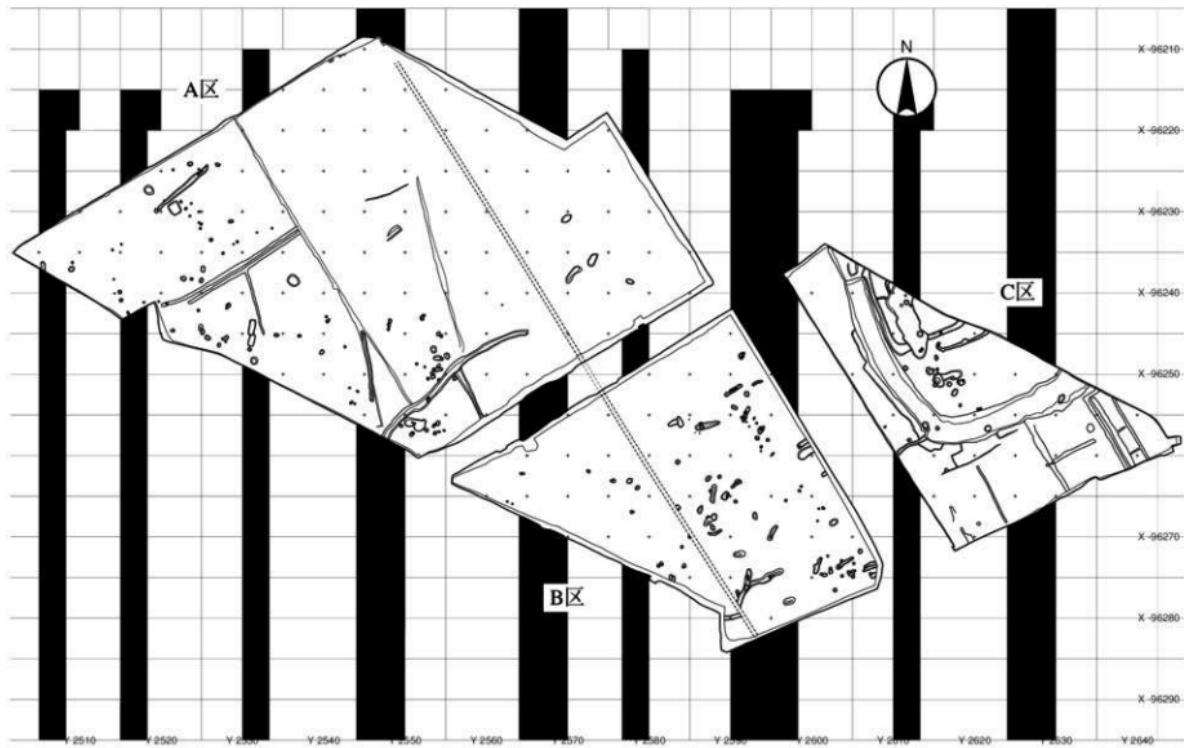


58



91

◆PL.7



調査区全体図 (S=1/600)